



嬉泉の新聞 第48号 2002年(平成14年)3月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/> E-mail:kisen@kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫

編集人=小山裕子

100点満点を求めていますか

静岡英和学院大学教授 小沼 肇

小学生がテストで80点をもらって帰ってきたら、お母さんは子どもに何て言うのでしょうか。これは、ある人から聞いた話です。今時のお母さんは「あとの20点はどこに置いてきたの」と、子どもに言うそうです。きっと「イタッ!!」と思われるお母さんが少なからずいらっしゃることでしょう。もちろん比喻ですから、実際には「間違っていたところを見直しておきなさい」とか「そこが正解だったら100点だったのに」と言います。いずれにしろ、子どもとしては「どこに置いてきたの」と言われているのと同じでしょう。

お母さんは、100点が「当たり前」「普通」と、錯覚しています。短期大学では、80点をとったら、最上級の『優』なのに……。私たちにとっても100点満点が当たりの社会は、とても暮らしにくい社会ですが、障害のある子どもたちや障害のある方々にとっては、なおさら「当たり前」や「普通」は辛い言葉です。私は、日本人のほとんどの人が100点満点症候群、当たり前症候群、普通症候群にかかっているような気がします。

7年前まで、私は30年間ある居住型の知的障害児施設におりました。7年前に短期大学の教員になって間もなくの頃、ショックなできごとがありました。実習に行く学生さんの実習直前の授業で、140名の学生さんに「皆さんは良い先生たちに教わっているので、自信をもって実習に臨んでください」と、おおまじめで励ましたところ、なんと学生さんたちは笑ったのです。

びっくりして前の方の学生さんに「何で笑ったの」とたずねると、ひとりの学生さんが「先生は良いけど、学生は悪いと先生は言いたいんでしょう」とのこと、思わず後ろの方の席の学生さんたちに「そうなの」と聞き返すと「そうだ」と言われてしまいました。たしかに偏差値は高いとは言えない短期大学ですが、学生さんたちがそんなにも劣等感を抱えていたとは意外でした。あまり得意でない勉強のことで心が傷ついた経験を誰もがたくさんしているようです。勉強が得意でない子どもたちには暮らしにくい世の中なのでしょう。私からみると、豊かな感性をもった素敵な学生さんたちなのに。

ある高校では、卒業式の練習をなんと2か月間も行います。最初の頃は、「カチャ」「カチャ」「カチャ」……と、背中の飾りの金ボタンが講堂の椅子の背もたれに当たる音が揃いません。

ところが、2か月後には「着席」「カチャ」とバッチン揃うとのこと。

さて、小学生のテストの点の話も、学生さんたちの劣等感の話も、「カチャ」の話も、何か変ではありませんか、滑稽ではありませんか。でも、私たちも障害のある人に満点を求めているのでしょうか、劣等感を持たせるような仕打ちをしていないのでしょうか、指導とか訓練の名のもとに変なことを押し付けてはいないのでしょうか。

障害のある子どもたちや障害のある方々が幸せになる本物の援助をしたいものです。

(子どもの生活研究所 第三者委員)

社会福祉援助論

石井 哲夫

— その11 —

万華鏡型と打ち込み型

社会福祉援助論の展開過程で、何回となく戻ってしまう原点の課題が職員論である。職員として好ましい資質とは何であろうか。今日のように社会福祉援助概念が変わって来ると、望ましい資質に関する内容は変わってくる。時代による資質という内容に関して検討してきたという話を聞かない。援助者の基本に、古くは山室軍平が述べた三つのHがあげられる。それは、'Hart'、'Head'、'Hand'の働きである。頭がよくて、心が温かく、しかも体が丈夫という人を想像しただけで気持ち弾んでくる。

社会福祉に人材がほしいという切実な思いがあるから、私の周辺の現場からは常に、「人材をよこせ」の大合唱が聞こえてくる。リストラされた人が沢山いるというこの時代でも、エネルギーの沢山

必要な難しい社会福祉現場には、人が集まりにくい。現場には、人食い虫が住んでいるというくらいなのに。こちらから苦労して人材を供給しても、それを大切に育ててくれない現場の体質がある。現場は、頼りに出来る人に責任を重く乗せていき、無理を利かせるので人材が早くギブアップしてしまう仕掛けとなっている。その逆に自分を甘やかす責任者がいて、怠けてしまうと、部下が参って、責任者のポイコットを始めるようになる。いずれにしろマンネリ化を許さないのがこの社会福祉現場の特質といつてよい。よきにつけ悪しきにつけ、人がめまぐるしく入れ替わる。この不安定な職場を乗り切るためには、優れたリーダーがいなければならない。リーダーは人使いがうまく、困難への対処も上手でなければならぬ。リーダーは、投げ出したくなる破局の場面を感じていても、重苦しい社

会福祉の現場で、一人陽気に明るい未来の希望を持って、職員の励みとなつていなければならない。昔の社会福祉現場のリーダーは、実直に仕事をしてきた人が多く、今時の社会福祉経営感覚を持ち合わせていない。職員と一緒に働くことが大好きで陣頭に立ってこの仕事に打ち込んできた人々である。名付けて「打ち込み型」のリーダーといつてよい。この道一筋型である。この人たちは自分の周りがぐるぐる回りだしていても、自分の体内の感覚が微動もしないように、ある感覚に焦点を当てた自分の価値観を生涯守り抜こうという類であり新しい観点から自分を見直そうとしない人々である。

それに引き替え、この頃目立つ社会福祉現場には、社会福祉改革の流れによって踊り出した現代型のリーダーたちが目に付くようになってきた。いかにもこの社会福祉改革を自分が創設したかのように、昔から、自分の考えに基づけば、万事が成功裏に進むという信仰を持つ教条主義的な人々である。この人たちは、仕事の本質を追究するということより、目的のためにはどのような手段もあえて辞さないという傾向を感じさせる。

社会に広く受け入れられるような善なるテーマを次から次へと探し出していく。それらに次から次へと乗り継いでいき時代の先端を走っていくような言動を示すことが出来る人々である。今まで利用者に対して、厳しい訓練や締め付けや反省させる対処しかできないように見えたこの人が、最近では、「昔から自由で本人発言や自己決定を尊重していた」と言っている。万華鏡型のリーダーたちである。この人たちは、嘗ての知識人がたええポーズと非難されようと、与えられた状況に対しては、一応は疑り深く、様々な見地にたった対案の提示を行ってきたという歴史的な事実には全く興味を持たぬような人々である。こういうリーダーだけでは福祉発展は心許ないと思つている。

この二つの新旧のリーダーの存在に対して、私の考えは葛藤している。この二つのリーダーシップをどう結びつけられるかが、施設経営から地域貢献への福祉援助の発展的展開なのであろう。まさに両型のリーダーを共存させる懐深く視野の深い運営感覚が求められるこのごろなのである。

私たちの世田谷からの発信

変わりゆくめばえ学園

大岩香代子

休園中のM君の家庭訪問を始めることになった。

もともと過敏で、集団の中で落ち着くことができにくかったM君は、年度当初のグループ替えを境に、一層落ち着かない状態になり、その後「外に出たがらない」ということで、休園するに至ったのだ。それまで、私たちはM君の安定を図るために、可能な限り個別的な取り組みをしてきたが、結局、力が及ばなかったことになる。

「しばらくは家でも本当に大変だったが、最近随分落ち着いた。M自身がもうめばえ学園を望んでいないように思う。」というお母さんの言葉に、複雑な気持ちを抱えながら訪ねると、明るい笑顔のM君が待ち兼ねたように迎えてくれた。今までにない穏やかな表情と家族との自然なやり取りの様子

に、目を見張ると同時に肩の力が抜けるような安堵感を覚えた。今まで周囲の刺激に翻弄され、乱れやすい自分の気持ちを持って余して苦労していたM君が、ようやくお母さんとの関係を軸に落ち着けるようになってきていること、そこにM君を交えた家族の安定した生活の基盤ができてきたこと、

「何より良かった」と思えた。お母さん自身が、「結局本人の苦しみを代わってあげることではできないのだ」と開き直ったことで動じなくなり、その中でM君も落ち着いてきた、とのことだった。

今まで私たちに、精一杯取り組みできたことは、施設の人工的な狭い枠組みの中で、却ってM君の過敏な面を引き出し、強調してしまうところがあったのかもしれない。同じ所から見ていると、物事の一面しか見えないことがある。視点を変えてみることの重要

性を実感させられた出来事だった。折しも、地域療育や家庭支援が盛んに言われる中、めばえ学園も保護者の多様なニーズに対応すべく、「変わることを求められている。考えると不安は多いが、とにかく始めていこう。きつと動いていく中でわかること、動いてみなければわからないことの方が多いのだろう。遅ればせながら、今ようやくスタートラインに立ったところである。

M君もこの春、めばえ学園を卒業し学校に行く。

(めばえ学園)

「アスベの会・東京」のこのころ

柏木 理江

アスベの会・東京のメンバー達の間では、最近「身体衰弱ゲーム」なるものが流行の兆しです。数人の人が集まって順番にカードを引いていき、そこに書かれた、まさに「身体が衰弱するような」過酷な腕立て伏せ30回、皆が笑える一発芸を披露、などなど。指令を遂行せねばなりません。カードを引く時のドキドキ感、カードを裏返して見た瞬間、過酷な指令に「うわーっ」と驚きや戸惑いの

歓声があがります。意地でもやってやるぞと顔を真っ赤にして頑張るメンバーに、「無理しなくてもいいんだよ、ね」と、おどおどと気遣いの言葉を掛ける他のメンバー。「ガンバレ」と嬉しそうに応援する人もいます。

この会は、高機能自閉症とアスペルガー症候群の方と、その保護者たちが中心となって運営する自助グループです。自分なりに努力はしていますが、なかなか周りの人たちと上手く折り合いがつかず、毎日の生活の中で苦労している彼らに、1か月に1回のびのびと過ごせるサロンを、という目的で始めました。嬉泉の協力で会場所に子研をお借りし、活動を始めて4年目になりました。頑なだったメンバー達も少しずつ時間をかけながら和んでいき、最近になってだんだんと、このような明るい笑い声のあふれる光景が見られるようになってきました。

4月には毎年恒例のパーベキュー大会をします。この会の活動を支援し、私たちと楽しく過ごしてくれるボランティアさん、大歓迎・大募集中です。

(子どもの生活研究所)

私たちの 赤塚からの発信

イズミヤバザー

稲嶺 裕子

去る一月二十六日、二十七日に板橋区のスーパー「イズミヤ」で、第十四回の福祉園バザーが開催されました。これはイズミヤさんのご協力により、夏と冬の年二回、板橋区内の八つの福祉園が合同で、オリジナルの製品販売を行っているのです。

赤塚福祉園では、陶芸作品、手織りもの、ビーズ作品、手すき和紙、珍しいところではラグバードという特別な機械を使って作るマットなどを出品しています。どの作品も利用者の思いがこもった、個性あふれる手作りの一品です。利用者の家族の方だけでなく、スーパーという一般の方が集まる場所で開催されているため、様々なお客様が訪れて下さいます。た

またスーパーに来ていて興味を持って下さる方、回を重ねることで「毎年楽しみにしている」と言っておられるピーターの方、更には「あの人はお皿の絵が上手になっただかしら？」と利用者さん個人の作風まで気にして下さる方。それに加えて「こういう作品が欲しい。」と具体的な要望を出して下さる方もいらっしゃいます。職員としては、今後の製品や活動を考えていく上で、大変参考になっています。

こういったバザーで作品を買って頂くことで、利益が上がったり、次の作品への利用者のモチベーションが高まることは勿論あります。しかしそれだけでなく、地域の方に福祉園のことを知って頂き、より身近な存在として感じて頂くための大切な機会のひとつと考えています。

(赤塚福祉園更生職員)

保育園、小学校との

交流 その2

濱野 伸子

前回の交流会よりも規模も大きく、保育園からは50名を超える子どもが来園し、更生の音楽グループとの交流をしました。赤塚福祉園の利用者も子ども達も入り混じっていろいろなゲームを一緒に楽しみました。スキンシップのあるゲームもありましたが、二度目ということもあり、ごく自然に打ち解けたふれあい生まれ、お互いの受け入れる力を強く感じる事ができました。子ども達から「また来るね」「握手してね」と声が上がると「また来てね」と利用者が答



「交流会」での様子

えるなど、職員を間に介さなくてもあちらこちらで自然に会話が生まれ、大人達、職員達がセッティングした以上の交流会となりました。

同日の午後には下赤塚小学校からのご招待を受け、「感謝の集い」に利用者の人達と参加してきました。六年生が総合学習の時間を使って老人クラブや福祉園と交流をし、そのお礼として開いてくれた会です。

合唱や交流の思い出の作文の朗読、手話付きの歌、鼓笛隊演奏の他にも、フォークダンスや玉入れなど、一緒に楽しむ内容もあり、盛りだくさんのプログラムでした。

赤塚福祉園との交流の思い出の作文では、「障害を持つ人たちが楽しく元気に自分に合った仕事をしている」と園の様子を生き生きと捉え、様々なことを感じ、学んだ、ということばをとてもうれしい気持ちで聴きました。

最近、町の中で色々な方から「こんにちは」と声をかけてもらうことが増えました。地域に根ざしていくこと、その歩みが一步步前進していることを感じています。

(赤塚福祉園更生職員)



袖ヶ浦からの発信

地域のパン屋さんを

目指して

青木さおり

袖ヶ浦ひかりの学園にパン工房ができてから今年で十七年目になります。職員の鈴木喜巳さんと利用者の伊藤訓育さんが二人三脚で始めたパン工房。今では、ひかりの学園「ひのき組」「さくら組」の利用者五名と、職員四名の計九名で毎日慌ただしく手作りのパンを作っており、パンの種類も二十八種類と増えました。定番の菓子パンのみではなく、生地にカレーやブラックペッパーを練り込んだもの、ウインナーやベーコンを入れたもの等、お客様の声に合わせて試行錯誤しながら新作のパンを出しています。また、地域に毎週予約をくださるお客様が多くなったり、先日のバザーではパン販売開始前から長い列ができていたり、作り手の私たちとしてはとて

も嬉しいことです。その一方で、もっと広く「のびろパン」を地域の皆さんに知っていただけたら：という欲を感じているところです。これから「地域のパン屋さん」にもっと近づいていければと思います。

「いつもお買い上げありがとうございます。これからもよろしく願います。」パン工房一同。
(袖ヶ浦ひかりの学園職員)



「たくさんできています!」

ボランティアセンターでの

活動を通して

川相 豊子

「袖ヶ浦市ボランティアセンター」は、袖ヶ浦公園に隣接する袖ヶ浦市社会福祉協議会の中にある、毎年、嬉泉祭りバザーを始め、地域の方々がいろいろな協力をしてくださる窓口となっています。そのボランティアセンターで、古切手を回収して海外支援事業に役立てるとい活動があることを聞きました。

のびろ学園の利用者の参加をお願いしたところ、ころよく受け入れていただいたので、さっそくボランティアセンターでの活動を体験することになりました。

地域の方と一緒に、もくもくと古切手の分類や切り取り作業をする静かな雰囲気を感じずにはいられないか：心配しましたが、職員がわかりやすいように手順を工夫し、分業で取り組んだところ、思った以上に技術も態度も安定していました。

ティータイムでは、摂食障害のある利用者が、スムーズに緑茶を

飲みほしたり、お皿に盛られたおやつをすすめられ、各種の菓子を一つずつ取り分けて食べるなど、学園での生活以上に落ち着いた態度でした。「もっと、どうぞ。」など抽象的なすすめ方は、加減がわからず戸惑うことなど、自閉症の方にとって安心なかわりを伝える機会ともなりました。

帰る道すがらはつらつとした利用者の笑顔の中に、人に役立つ喜びや自信が芽生えているように感じられました。

障害者は「ボランティアを受ける側」という印象が一般的なようですが、入所していてもできること、さらには自閉症にしかできないこともあるのではないでしようか。

平成十六年には、学園の近くに袖ヶ浦市の健康センターが開所されると思います。お互いがボランティアの精神で、利用者が地域の人々の中で活躍する姿が目に見えられました。また、利用者と共に町づくりの一端を担う：いつかそのような日が来ることも夢ではないかもしれません。

(袖ヶ浦のびろ学園職員)

嬉泉トピックス

◆第六回発達障害

療育研究会開催

(二月二六日)

第六回研究会のテーマは「軽度発達障害幼児の療育支援について」。この中でいう「軽度発達障害」とは、注意欠陥多動性障害、学習障害、高機能自閉症をさしており、文部科学省の特別支援教育の対象となる発達障害である。

研究会は、国立特殊教育総合研究所の原 仁氏による教育講演に続き、四本の「個人研究発表」が行われ、本会の趣旨により実践研究への活発な討議が行われた。午後のシンポジウムでは、従来の療育とは別に、通常の学級で学んでいくであろう軽度発達障害児の療育支援はどうあったらいいのか、日々現場の最前線を取り組んでいる発表と参加者からの熱心な討議が交わされ、多くの課題が浮き彫りになった。(事務局友田篤)

◆第十八回自閉症治療

教育実践講座開催

(二月八・九日)

社会福祉基礎構造改革が進展している。その中で、障害者への援助支援はややもすると制度論に偏りがちとの感を強く持つが、自閉症関係施策においても、来年度、自閉症発達障害支援センターが創設される。長年に亘り関係者が望んできた自閉症の支援センターである。こうした動向と、自閉症支援の援助技術、特に強度行動障害支援の観点を講座が企画された。

二月八日は、袖ヶ浦のびろ学園、袖ヶ浦ひかりの学園を会場とし、日常活動を中心とした施設見学と、「自閉症児者へのトータルケアプラン」と題し、あさけ学園の奥野宏二氏と石井所長の対談が行われた。二月九日は、会場を海外職業訓練協力センターに移し、シンポジウム「医療・教育・福祉の連携」

ケースカンファレンス「強度行動障害」が行われた。

受講生は施設職員や養護学校教員が大多数であり、各々が現場で自閉症処遇や教育に取り組んでおられる方々であった。講座への聴講、懇談会での歓談にも関心の高さが示され、活発な意見交換が行われた。自閉症への一貫した支援体制には何より諸分野、諸機関の連携が重要である。そうした連携への可能性を示したセミナーとなった。(事務局 川相智史)

◆第二回嬉泉祭りバザー開催

(二月二四日)

出口の見えない不況の中、天候にも恵まれたバザーは千人を超える来場者を迎え、大盛況のうちに終わることができた。

今回は、「地域との交流」をテーマに据え、根形中学校のソーラン節、フリーマーケット、地元商店の出店、地域施設の参加など、地域参加型を色濃く打ち出した。今回は「お餅つき」を行い、つきたてのお餅を来場者の方々に無料で振る舞った。お餅が足りなくなるほどの好評さに、所長を始めスタッフ総出での忙しさだった。また、新たな試みとして掘り出

し物市のコーナーを作った。値段をつけることに心苦しさを覚える物をコーナーに集め、値段はお客様に決めていただく形をとったのだが、予想に反して完売となった。

バザーが成功したのも、ご協力・ご尽力下さったご父母の皆様、関係者の皆様、ボランティアの方々、並びに出店して下さった企業・商店の皆様方のお力添えのお陰であり、心からのお礼を申し上げます。(総務 小山徹信)

◆専門講座「高機能自閉症とアスペルガー症候群を

知ろう」開催

(二月二八日)

参加者は教員や施設職員など、定員四十名を越え、お断りをする方が出たほどで、この講座のテーマの関心の高さを感じた。

「東京・アスペの会」のスーパーバイザーを兼ねる柏木理江(子研職員)から、たくさんの方のケース事例を通して、この人達の生きにくさ・生真面目さ、などが語られた。そして、この人達を理解することや心の傷を作らないための、人の支援が教育や療育の場で切に望まれる、ということが強調された。(福祉活動センターよるこび 小山裕子)

嬉泉の



&



お題其ノ式

成年後見①制度編

事務局長 石井 啓

Q 吉…成年後見の制度とはどのようなものなのでしょうか？

A 吉…大まかに言うと、民法等で定められたものと社会福祉法に根拠の求められるものがあります。

民法等で定められたものとしては、従来の「禁治産」「準禁治産」に替わって、本人の意思の尊重を盛り込んだ「身上配慮義務」を一般的規定とした「成年後見」「保佐」に、新たに「補助」を加えたいわゆる『法定後見の三類型』と、全く新しい考え方に基づいた『任意後見契約』の二種類があり、いずれも「財産管理等の法律行為を行う保護・支援制度」であることが特徴です。

一方社会福祉法に根拠の求められるものとしては、第二種社会福祉事業に位置付けられている『福祉サービス利用援助事業』

があります。これは介護保険が

施行された時に先行してスター

トした「地域福祉権利擁護事業」

を包括するもので、専ら「生活

に必要な不可欠な福祉サービスの

利用に関する情報提供、相談と

代理)を行うことになっており、

上記の『法定後見』や『任意後

見』がその範囲をあくまでも法

律行為のみに限定しているのに

対して、福祉サービス利用契約

の代理といった法律行為も行う

など一部に役割の重なることが

あるものの、福祉サービスの利

用や日常的金銭管理や書類等の

預かりなどより身近な援助を重

視した制度だと言えます。

Q 式…これらの制度は、どのよう

に使い分けたいのですか？

A 式…まず本人の状態によって利

用できる制度が異なってくるこ

とと、その上で目的に応じて選

択することになると思われます。

例えば本人の「事理弁識能力

(判断能力)」がある場合には、

将来的に不動産の管理などの大

きなことを任せるために『任意

後見』という形であらかじめ後

見人を選任しておき、すぐに必

要な日常の金銭管理や在宅福祉

サービスの利用援助などは『福

祉サービスの利用援助事業』を活

用するといったケースが考えら

れます。本人の判断能力が不十

分な場合には、『福祉サービス

利用援助事業』は利用できない

場合があるので、程度によりど

の類型になるかは異なりますが、

先に『法定後見』により後見人

等を選任し、その選任された後

見人が本人の身上監護として、

福祉サービスの利用契約を援助

または代理することになります。

Q 参…これらの制度は、実際に誰

が担い手になる(なれる)のですか？

A 参…『法定後見』及び『任意後

見』においては、自然人として

親族、弁護士、司法書士、ソ

シャルワーカー等及び法人が

「後見人」「保佐人」「補助人」

に選任されたときに、本人の保

護・支援の担い手となります。

『福祉サービス利用援助事業』

は、基幹的社会福祉協議会、N

PO等の法人が委託されて実施

しています。(つづく)

編集後記

(福) 嬉泉に在籍している保

護者の方々に、発達障害児者

の方との暮らしに役立つ情報を、

提供して頂くアンケートを行っ

ている。いまま少しずつ集計作業

を行っているが、『電車やバスな

の公共の乗り物』の項目の回答

の中で、『京王電車・京王バスが

よい』と挙げる方が多い。『パ

リフリー』という言葉だけが定着

した最近でも、このご時世では少

しばかり変わった振る舞いをする

人達と出かけることの気重さは変

わらない。そういう状況の中で、

前記の会社の職員の方々のやさ

しさや気配りが日常的に行われて

いることに励まされるご家族の方

が多い。関係者の一人として心

からのお礼をこの場を借りてお伝

えしたい。

いろいろな啓発活動を各方面

に展開することも必要であるし、

分かりにくい『自閉症』について

発信をしつづけることも大事であ

る。でも障害に関わらずハンディ

を持った人たちへの当たり前の気

配りが出来る社会であって欲しい。

春がそこまで来ている温かさを感

じながらそう願うこの頃である。

(編集人 小山)

ひかりのタイムス

独立第42号

毎年、袖ヶ浦で行われるバザーに、利用者が自主的にお手伝いに来てくれます。今年のバザーについて、三名の方が原稿を寄せてくれました。

地域交流

伊藤 訓育

二月二十四日袖ヶ浦バザーを、行ないました。パンや野菜を売りました。

僕は、前日からパンの仕事を、手伝いました。

袖ヶ浦のバザーは、毎年仕事が出来る様に、最近では、企業の不況がつづくなか、バザーは、よく健闘しています。かつての懐かしい、職員がいました。

バザーは、売上を、しています、なぜ、やっているか、お客さんは、毎年うれるようなことが、ありませんので。うりに来ます、完売することが、できます。

赤塚福祉園の、豚まんがうれることに、しています。

パンや野菜の、仕事できています。市民の仕事を、手伝って、いることに、しています。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

今年の、のびるバザーで

飯田真奈子

今年のバザーで、私は、地域交流で仕事をしました。当日は天気にも恵まれて、沢山のお客さんが来ました。私は外の売り場で、野菜とパンを売りました。パンの販売は、時間限定でしたが、例年のごとく、ものすごいスピードで、短時間であつというまに全部売れてしまいました。野菜の販売の時は、お客さんがとぎれとぎれで、余裕がありすぎる位でした。私は袋に入れるのと、呼び込みをしました。今年のバザーで感じたこと

ですが、グループホームで生活を始めてから、三年ちょっと過ぎて私にとって、ひとつお勉強になった事がありました。それは、呼び込みをするタイミングでした。毎日、ダイエーに行き、店員さん達が「いらっしゃいませ！」と言う時は、お客さん達が、ある商品売り場に近づいた時で、そばに誰も居ない場合には、だまっている、ということでした。前は、当てずっぽうに、呼び込みをしていました。しかし、町なかで生活をしていて、毎日、公共のお店の中で、店員さん達の動作を見てきて、自然と、私の中に身につきました。それで、今回の販売の時には、プロの店員さんを参考に、私は、近くに、お客さん達が通過した時に「いらっしゃいませ！」と言いました。今年のバザーは、町なかで身についた事が生かして良かったな、と思いました。

(グループホーム・春のひかり利用者)

千葉バザーで思う事

山岸 裕

このバザーの目的は構造改革で施設に対する補助金や、措置費が

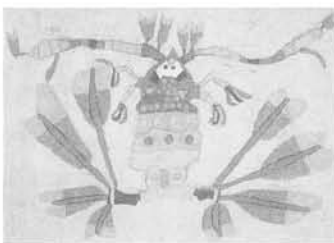
カットされている、福祉を取り巻く状況はかなり厳しい。それでも素人商人の施設側はバザーをやらざるをえない。

そんなバザーになぜ私は手伝うのであろうか。普段見ない東京の職員と千葉の職員が一堂に会するからかもしれない。その為に行っているのかもしれない。

このバザーのアトラクションで中学生が「ソーラン踊り」をしたのがよかった。特に女子が黒髪で踊る姿は可愛かった。目の保養になった。

個人的な事だが、年離れた母の代役としてバザーを手伝う。元氣だった母も、親達も老いる。"老い"とはつらい物である。そういう事を実感するバザーだった。

(グループホーム・春のひかり支局長)



アトリエ・アウトス 浜ノ園武生画
「ミジンコⅡ」